

論文審査の結果の要旨

氏名：平島 達也

博士の専攻分野の名称：博士（獣医学）

論文題名：犬の会陰ヘルニアに対する定量的診断法および手術法の確立に関する研究

審査委員：（主査） 教授 浅野 和之

（副査） 教授 中山 智宏

（副査） 教授 大滝 忠利

1. 獣医学研究分野における学術的重要性と新規性

本論文は、小動物臨床現場で比較的遭遇する犬の会陰ヘルニアに対する診断法および治療法を検討した研究である。会陰ヘルニアは直腸検査や X 線検査で主観的に診断されているが、本論文では CT 検査によって会陰ヘルニア症例の骨盤隔膜構成筋の萎縮程度を定量的に評価できることを示した。これまで、CT 検査を用いて会陰ヘルニア疾患犬の骨盤隔膜構成筋の筋肉量を定量化した報告は見当たらない。さらに、犬の会陰ヘルニアでは、骨盤隔膜再建術の前に去勢が実施されるが、本論文では去勢後の総鞘膜を有茎状に転位させることによって骨盤隔膜を再建できることを証明し、総鞘膜が使用できない場合はポリプロピレンメッシュを用いて再建できることを示した。このように犬の会陰ヘルニアにおいて、新しい診断学的評価法や再建手術法を検討し、その臨床的有用性を示すことができた。以上のことから、本論文は臨床獣医学上、学術的にも重要であり、新規性を有しているものと判断された。

2. 関連する国内外の研究内容の調査・解析の妥当性

犬の会陰ヘルニアに対する診断法に関する検討では、健康犬および疾患犬の CT 検査を実施し、筋肉量の定量化を検討して比較し、さらに治療法に関する検討では、有茎状総鞘膜転位術およびポリプロピレンメッシュを用いた再建術を行って、手術所見や術後合併症の発生、術後の治癒率などを評価した。本論文で採用した手術法を疾患群で実施して治療成績をまとめた報告は見当たらない。また、これらの術式の治療成績は他の会陰ヘルニア整復術を実施した既報の治療成績と比較検討している。したがって、本論文の調査・解析は妥当であると判断された。

3. 得られた研究成果の公表実績（論文発表・学会発表）

本論文の第 2 章部分および第 3 章部分が *Frontiers in Veterinary Science* に原著論文 2 報としてそれぞれ掲載されている。

4. 獣医学研究分野または社会に対する波及性

本論文で得られた成果は小動物臨床の発展に大きく寄与するものであり、犬の会陰ヘルニアにおける新たな診断法および治療法を提唱している。本論文で評価された診断法による定量的評価は、最適な術式を客観的に決定できる可能性を有しており、本論文で評価された治療法によって会陰ヘルニアに対する術式の選択の幅を広げることができた。したがって、本論文は臨床獣医学分野の発展に寄与するだけでなく、動物福祉や社会に対する波及性を有していると判断された。

5. 論文作成に対する自主的な研究遂行性

本論文において、第 1 章から第 4 章までを主導的に実験を進めており、実際の手術症例ではデータの収集および解析も自主的に取り組み、最終的な結論を導き出し、自ら論文としてまとめることができた。このように、自主的に研究を遂行し、論文の作成を適切にできる能力を有していると判断した。

よって本論文は、博士（獣医学）の学位を授与されるに値するものと認められる。

以上

令和 6年 2月 15日